

論文

中国人と誣告—歴史問題化の手法

北村 稔（立命館大学名誉教授）

はじめに

誣告とは故意に事実を偽って告げることであり、特に他人を罪に陥れるために告訴することをいう。刑法では誣告は虚偽告訴罪として処罰され、告訴でなくても他人の処罰を求めての申告も、虚偽告訴罪となりうる。

中国人が日中関係史上の種々の出来事を歴史問題化させる基本的手法は、誣告だと捉えると納得がいく。嘘の告発で自分たちの正当性を言い募り、他方で敵（日本）を非道で正義に背く存在だと貶めるのである。ちなみに中国人の誣告は、多くの場合は反日的日本人とのコラボとして出現する。昨今かまびすしい中国人慰安婦問題は、その典型である^{注1}。

筆者は別冊『正論』26（平成28年3月）に、「＜南京＞遺産登録に見える中国の病理、誣告の横行＜谷寿夫死刑判決書＞」を発表し、南京事件を取り巻く誣告の実態と今日まで続くその連鎖に焦点を絞り、誣告を出現させる中国社会の病理を解剖した^{注2}。

本稿では日中関係史に留まらない各種の歴史事象を分析対象に取り上げ、歴史問題を立ち上げる中国人の手法を分析する。

* 中国人が中国人を誣告する

中国人自身が記述する中国近現代史においても、誣告は頻繁に出現する。

日本でも20万部近く売れた、ユン・チアン（Jung Chang）・ジョン・ハリデイ（Jhon Halliday）共著の『マオ 誰も知らなかった毛沢東』（土屋京子訳、講談社、2006年11月。以下、『マオ』と略記）という書物がある。原書のMAO: *The Unknown Story*は、2006年6月にロンドン、ニューヨーク、トロントで同時に刊行された。

『マオ』は、毛沢東を残酷非道な人間として徹底的に貶めることを目的とした書物であるが、執筆の根底には、中国共産党員であった愛する父親を文化大革命で廃人にされたことへの、著者ユン・チアンの深い怨念が存在する。この怨念につき動かされたユン・チアンは、文化大革命を発動した毛沢東を、その人生の出発点から利己的で残忍であり不道德な性格の持ち主であったと誣告し、さらにこの毛沢東の性格が文化大革命を含む中国近代史上の種々の悲惨な事件を出現させたのだという観点から歴史を脚色し、従来の常識を覆す「種々の歴史事件の真相」を提示する。毛沢東の個人的性格が中国史全体に悲劇をもたらしたという観点は、毛沢東が歴史の行方を左右する帝制的権力を持っていた事の承認である。

筆者（北村）は2008年に、「ユン・チアン『マオ 誰も知らなかった毛沢東』を読み解

く「中国人の特異な歴史認識の正体」と題する文章を発表した³³。この文章は『マオ』の書評であるが、副題に示される〈特異な歴史認識〉という表現からは、筆者(北村)が未だこの時点では、中国人による歴史問題化を誣告だと明確に把握していなかったことを示す。

ユン・チアンが行う毛沢東の人格への攻撃と、毛沢東の人格に基づく歴史事件への〈新解釈〉は、巧みに仕組まれた誣告であり、別の角度からみれば歴史への過度の脚色である。

『マオ』が、毛沢東の人格への誣告の基礎に据えるのは、1918年当時、湖南第一師範学校で学んでいた24歳の毛沢東が教科書であるドイツ人哲学者のフリードリッヒ・パウルゼン『倫理学体系』(中国語訳本、原書名はSystem der Ethik)の行間に、注釈として書き込んだ個人的な見解である。

『マオ』には、次のように述べられている(日本語版上巻、35-6頁)。

「・・・この注釈(書き込み—北村)には、毛沢東の人格の中心的要素が表れており、その後の六十年の人生において、変わることなく毛沢東の統治を特徴づけることになった。毛沢東の倫理観の核心はただひとつ、〈我〉があらゆるものに優先するという概念だ。・・・毛沢東は自分に個人的利益をもたらすもの以外は、いっさい何も信じなかった。・・・自分の衝動と軋轢を生じる場合には、良心など顧みる必要もない、と書いている。・・・毛沢東の倫理観は、絶対的な自己中心性と無責任が中核をなしていた。・・・毛沢東の人格において、もう一つ明らかに見えてきた要素は、動乱と破壊に対する嗜好である。・・・毛沢東は死に対してさえ無頓着な姿勢を表明している。・・・二四歳の毛沢東がはっきり表明したこれらの見解は、生涯を通じて毛沢東思想の核心に存在し続けた」。

ユン・チアンは、毛沢東が以上のような個性の持ち主であったがゆえに、毛沢東の最初の妻の楊開慧に対する冷酷な仕打ちが発生したのであり(楊開慧は毛沢東との間に二児を設けたが、毛沢東のゲリラ活動中の1930年に故郷の長砂で地方軍閥により銃殺された—北村)、日中戦争では他の共産党員の意見に反してでも勢力温存のために日本軍と戦わなかったのである(ゲリラ戦闘の基本戦術は、「敵進めば我引く」すなわち「強敵と正面からはぶつからない」ことであった—北村)、という。さらにその冷酷残忍な性格ゆえに大躍進政策や文化大革命で人命をもてあそぶかのような大混乱がもたらされ、その結果として数千万人に及ぶ膨大な犠牲者が出現したのであり、核技術をソ連から買うためには、国民の飢餓を顧みない食糧輸出も平気だったのだ、と³⁴。

『倫理学体系』に書き込まれた毛沢東の注釈は、原文で読むことができる³⁵。

ちなみに毛沢東が「注釈」を書いた当時の中国では、青年知識人の多くが、宗法制度(宗族内の規律・規則)を支える儒教倫理が個人の人格を押しつぶしていると考えていた。文学者の魯迅が雑誌『新青年』に「狂人日記」を書き、儒教倫理は〈人を食う封建道徳だ〉と攻撃したのは、毛沢東が注釈を書いた同じ年の1918年である。このような背景のもとで考えれば、毛沢東が宣言した〈我〉の絶対的肯定とは「個人の尊厳」への叫びであり、『マオ』のいう単なる「利己主義」の絶対的肯定ではない。『マオ』は、毛沢東のこの部分の文意を改竄している。『マオ』(上巻、36頁)で、「・・・この世界には人間がおり

物事があるが、全ては〈我〉の為にある」と訳される原文は、為我（〈我〉の為）ではなく、因我（〈我〉による＝私という存在に基づく）なのである。存在の根本は自分であるというアイデンティティーの確認であり、すべての存在は自分のためにあるという「利己的」な意味ではない。（原書の英語版ではonly for meと翻訳されている）、

同様に『マオ』が批判する〈毛沢東の動乱と破壊に対する嗜好や死に対する無頓着〉も、中国語原文の内容は、「乱世を好むものではないが」ということわりを付けた上で、毛沢東による死と生の循環に対する哲学的感慨である。

ユン・チアンの手口は、文章の一部だけを切り取って文意を歪める「断章取義」の典型である。

* 日中関係史の記述に時事問題を流し込む手法

次に本題の日中関係史に戻り、日本でも有名になったラーベの日記を取り上げてみたい。ラーベはドイツのシーメンス社の代表者として1931年から南京に滞在し、日中戦争の勃発時から日本軍の南京占領中を通じ南京に留まっていた人物である。筆者は2008年にPHP研究所から中国人の友人である林思雲氏との共著で、『日中戦争—戦争を望んだ中国、望まなかった日本』を刊行した。執筆に際しては全体の構成を北村が作成し、章単位で執筆部分を定め、林氏の中国語原文を筆者が日本語に翻訳して全体の記述を統合した。

ちなみに林氏の担当部分には、ラーベ日記（1937年11月9日）の中国語訳（江蘇教育出版社、1997年）からの引用部分として、以下の文面が存在する。

「私の判断では、日本軍の陸路による進軍は間違いなく容易ではない。ヒンデンプルクライン（ドイツ軍が第一次世界大戦中に西部戦線に構築していた要塞群を中心とする防衛線—北村注）のような戦線を突破しなければならず（中国側は上海・南京間にドイツ軍事顧問の指導で強固な防衛陣地を建設していた—北村注）、人員の重大な死傷をみるであろう。水路を征服するのもそんなに容易ではない。少なくとも揚子江の水雷封鎖を一掃しなければならず、江陰付近の要塞を破壊しなければならない。日本軍は大規模に毒ガスを使うことによってのみ南京を攻略できるといわれているが、日本人は実際にそのようにやるだろう」。

そしてこれに続く地の文章で林氏は、「しかし実際には、日本軍は毒ガスを使うこともなく、・・・わずか一か月で首都の南京を占領したのである」と記述していた。北村は何の疑いもなく、林氏の記述するラーベの日記の中国語訳を日本語に置き換えたのであるが、この部分にはすさまじい誣告の存在することが明らかになる。経緯は以下のとおりである。

『日中戦争—戦争を望んだ中国、望まなかった日本』は、数年後に茂木弘道氏が事務局長を務める「史実を世界に発信する会」により英訳されることになり^{注6}、北村は英訳担当のアメリカ人のプレナー女史（Connie Prener）が作成し、茂木氏を経由して送られてくる英訳原稿を十数回にわたり校閲した。ちなみにプレナー女史の英訳は素晴らしく、こ

んなに日本語を深く理解するアメリカ人がいるのかと舌を巻いた。そして何回目かの原稿校閲のさいプレナー女史が、ラーベ日記の英語版(*The good man of Nanking*, 1998)には毒ガス云々の記述は無いと知らせてきた。北村は早速に手元にあったラーベ日記の日本語版(『南京の真実』、1997年)を調べると、毒ガス云々の記述はない。英語版と日本語版がドイツ語版ラーベ日記(1996)を翻訳したことを考えれば、中国語版の翻訳者がドイツ原文にない脚色(誣告である)を行ったと考えざるを得なかった。

このたび筆者は本稿の執筆にあたり、立命館大学図書館が所蔵するドイツ語版原典の記述を、プレナー女史が依拠した英語版と対照した。そして以下の事実を確認した。すなわち英語版はドイツ語版を逐語訳的に訳出している事、更にはあろうことか、ドイツ語版原文には中国語版(1997年)に出現する1937年11月9日の記述そのものが存在しないのである(前日の8日と翌日の10日の記述はある)。

毒ガス云々を11月9日のドイツ語原文の記述に書き込んだのではなく、ラーベ日記には存在しない11月9日の記述をまるまる捏造したのである。

ちなみにこの重大な捏造については、プレナー女史の指摘に基づき英語版と日本語版を調べた際に気付くはずであった。しかし当時は毒ガスの記述のみに執着しており、まさか日記の中に新たな日付を捏造するなどとは考えも及ばず、「心ここに在らざれば視れども見えず」の言葉どおり、見逃してしまったのである。中国人の誣告のすさまじさを、認識していなかったのである。

この誣告の背景について、筆者(北村)は以下のように考える。中国語版の刊行に先立つ1993年には、多国間で化学兵器廃棄条約が調印され1997年に発効した。このあと日本は、中国に遺棄されていた化学兵器の廃棄事業を中国との協力のもとに展開する。ちなみに1996年の時点で、NHKが遺棄された化学兵器に関する中国現地取材を行っていた。この辺りの状況を踏まえ、歴史問題化への翼賛として中国側が毒ガス云々の記述を捏造したと思われる。

* 蔣介石への誣告—上海クーデター—

中国共産党が編纂する歴史にとどまらず、日本の中国近現代史研究においても蔣介石が共産党員を虐殺したと記述される「上海クーデター」とは、概ね以下のような内容である。<第一次国共合作(1924-27年)中の1926年7月に、蔣介石は国民革命軍総司令として広州を出発し、北京占領を目指して北伐を遂行していた。しかしその途上で、対立が高まっていた共産党員たちの粛清を決意し、国民革命軍が占領した直後の上海で、1927年4月12日に多数の共産党員を逮捕し処刑した>。

筆者(北村)は二十年あまり、第一次国共合作の研究にたずさわり、『第一次国共合作の研究—現代中国を形成した二大勢力の出現』(岩波書店、1998年)を刊行した。使用した資料は多岐にわたり、国共合作の仲立ちをしたソ連側からの資料や、国民党が1995年になり公開した当時の会議資料などが含まれるが、共産党側の資料に関して言えば、中国国内で思想自由化が急速度で進行していた1980年代に刊行されたものが中心である。これらの資料では、中国が台湾との接近を試みる最大の障害となっていた「上海クーデター」に対して、正面からの否定ではないが当時の種々の「事実」を提示することによ

り、その不存在を暗示しようとする夥しい記述が出現していた。たとえば、従来から蒋介石の「上海クーデター」の象徴的場面として掲げられてきた「共産党員が斬首される処刑写真」は、北伐軍に対抗して上海を占領していた孫伝芳配下の兵士たちが、蒋介石の北伐軍の上海接近を知らせるビラをまいた労働者たちを逮捕して処刑した写真であることなどが、理解されるのである。

たしかにこのあと上海を占領した蒋介石軍は4月12日に共産党員たちを一時的に拘束したが、処刑などは程遠いはなしであった。そして蒋介石は4月18日に国民政府所在地を広州から南京に移転させたが、南京国民政府の成立式典にはソ連政府の代表が出席し、蒋介石には国共合作を一方的に破棄する心づもりは、この時点では存在しなかった。この間の詳細な経緯は拙著をお読みいただくしかないが、蒋介石の「上海クーデター」で発生したとされる共産党員の処刑は誣告である。後の日本軍による南京占領に際して「大虐殺」が発生したという中国側の誣告と同質の構造を持っている。ちなみに日本軍の南京占領に際して「大虐殺」が発生したという誣告は、蒋介石の率いる国民党が仕組んだものである。

おわりに

以上のような誣告を出現させる中国人の精神的背景については、冒頭に掲げた『正論』の原稿に加えて、『月刊HANADA』の2006年10月号に掲載された拙稿「中国人の異常な精神構造」を参照していただきたい。中国の著名な哲学者である李澤厚の研究をベースにして、中国人の精神世界を解剖したものである。そして、主観的願望（自分たちの倫理観）と客観的事実とを一体化させようとする朱子学の基本原理が、誣告を促すという結論にたどり着いた。

朱子学でいう性即理とは、人間の〈本性〉と客観世界を律する〈理〉が一体化していることを宣言する言葉である。言い換えれば、自分たちの主観意識に対して無条件の客観性が与えられたのであり、朱子学により中国人は究極の「自己中」を実現させることになった。したがって中国人にとって、「誣告すること」は「他人を罪に陥れるために嘘をつく罪—虚偽申告罪を犯すこと」ではなく、性即理への確信を基礎に、自分たちの主観的願望を実現するために、その願望を客観的事実だと言い募ることなのである。したがって主観的願望が変化すれば、誣告は簡単に取り下げられるか、修正される。蒋介石「上海クーデター」に対する中国側の対応の変化が、それを物語る。

注

注1 北村稔「中国人慰安婦問題の虚構を暴く」（『日本』平成29年6月号）参照。

注2 黒竜江大学の『北方法学』に掲載された姚志偉「十告九誣・清代誣告盛行之剖析」（〈十件の告訴のうち九件は誣告・清代の誣告盛行の解剖分析〉）を援用した。この論文は中国人自身が執筆し、誣告の蔓延を十七世紀以来の歴史的背景と社会的背景のもとに論じており、中国人の立ち上げる歴史問題化の手法を把握するうえで多くの示唆に富む。但しその分析は、誣告を生み出す中国人の精神世界にまでは及んでいない。

注3 『吉田富夫先生退休記念中國學論集』（汲古書院）、所収。

注4 大躍進政策は、毛沢東が1958年から61年まで主導した農業と工業の大増産運動。大量の餓死

者をだす大失敗に終わり、責任を取った毛沢東は国家主席の地位を劉少奇に譲った。しかしこのあと毛沢東は、1966年から劉少奇打倒の文化大革命を発動した。農民の飢餓を顧みない食糧輸出の実態は、北村稔『中国の正体』（PHP文庫、2015年）第四章〈幸福になれない中国人〉を参照。

注5 「倫理学原理批語」（毛沢東文献資料研究会編・竹内実監修『毛沢東集』補巻九、蒼蒼社、1985年）。

注6 *The reluctant combatant : Japan and the Second Sino-Japanese War* by Kitamura Minoru and Lin Siyun ; translated by Connie Prener, University Press of America, c2014